

あきたからの米レター

令和4年産 水稻の作況指数

本県の作況指数 95 の「やや不良」確定

10a当たり平均収量は554kg

令和4年12月9日発表

東北農政局

令和4年産 水稻収穫量

令和4年12月9日

東北農政局

区分	作付面積 (子実用) (ha)①	ふるい目幅1. 70mm		ふるい目幅1. 90mm			(参考)	
		10a当たり 収 量 (kg)②	収穫量 (子実用) (t)①×②	10a当たり 収 量 (kg)③	10a当たり 平年収量 (kg)④	作況指数 ③/④	各時点の 作況指数	
							10/25	9/25
全 県	82, 400	554	456, 500	517	543	95	95	96
県 北	17, 200	530	91, 200	493	526	94	94	95
中 央	30, 100	548	164, 900	505	540	94	94	95
県 南	35, 100	571	200, 400	537	555	97	97	98

東北農政局が12月9日に本県の作柄を公表した。これによると、本県の10a当たり収量は554kg(ふるい目幅1. 70mmベース、以下同様)で、作況指数は「95」(農家等が使用しているふるい目幅1. 90mmで517kg)の「やや不良」となった。作柄表示地帯別の10a当たり収量は、県北が530kg(作況指数「94」)、県中央が548kg(同「94」)、県南が571kg(同「97」)であった。また、令和4年産水稻の作付面積(子実用)は82, 400haで、前年産に比べて2, 400ha減少し、収穫量(子実用)は456, 500tで、前年産に比べて44, 700t減少した。このうち、主食用の収穫量は382, 800tで前年産に比べ39, 200t減少した。

作況標本筆調査による収量構成要素では、1㎡当たり有効穂数は404本(平年比95%)、1穂当たり粒数は76. 5粒(同104%)で、1㎡当たり全粒数は30. 9千粒(同98%)となった。登熟は玄米粒数歩合が88. 3%(同99%)、玄米千粒重が22. 2g(同101%)で、千粒当たり収量は18. 4g(同98%)であった。

県内の作柄概況は、全粒数(穂数×1穂当たり粒数)が平年に比べて「やや少ない」、登熟(開花、受精から成熟期までのもみの肥大、充実)は「やや不良」となったことから、10a当たり収量は554kgで、前年に比べて37kg減少した。

地帯別主な収量構成要素

令和4年12月9日

東北農政局

区 分	1㎡当たり 株数		1㎡当たり 有効穂数		1穂当たり 粒数		1㎡当たり 全粒数(千粒)		粗玄米 粒数歩合		玄米 千粒重	
	本年 (株)	平年比 (%)	本年 (本)	平年比 (%)	本年 (粒)	平年比 (%)	本年 (粒)	平年比 (%)	本年 (%)	平年比 (%)	本年 (g)	平年比 (%)
全 県	18. 5	98	404	95	76. 5	104	30. 9	98	88. 3	99	22. 2	101
県 北	18. 6	98	403	94	75. 9	106	30. 6	100	86. 9	98	22. 3	102
中 央	18. 3	97	398	93	77. 1	104	30. 7	97	88. 9	99	22. 0	101
県 南	18. 7	99	409	97	76. 3	102	31. 2	99	88. 8	100	22. 4	101

1. 70mm篩目

令和4年産 水稻の作況指数「95」のやや不良

地帯別作柄は県北・中央「不良」、県南「やや不良」

秋田県の10a当たり平均収量は554kg

令和4年12月9日発表
東北農政局



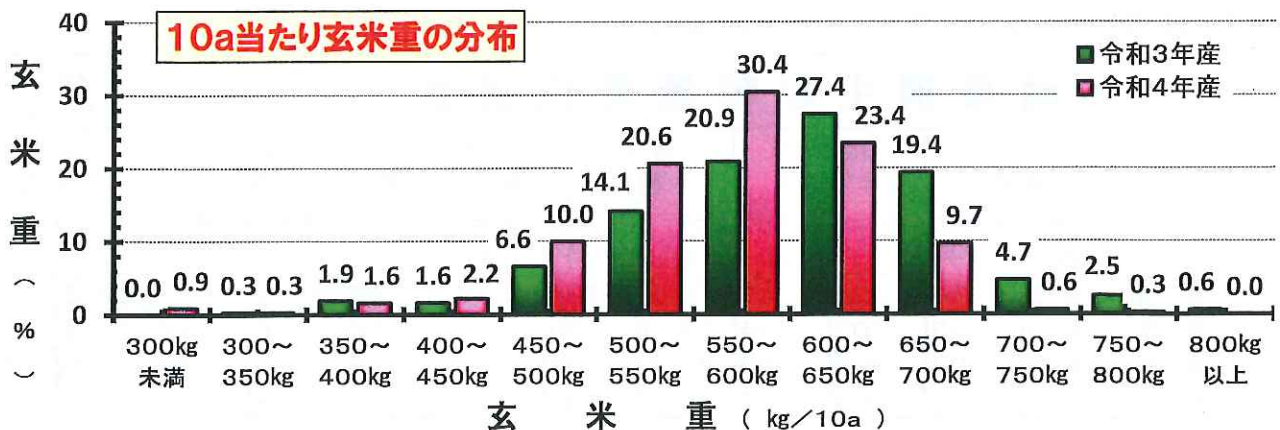
秋田県地帯別作柄の良否

東北6県の地帯別作柄の良否

玄米のふるい目幅別重量の分布状況

令和4年12月9日
東北農政局

区分	収量	2.00mm以上		1.90mm以上		1.85mm以上		1.80mm以上		1.70mm以上	
		収量(kg)	比率(%)	収量(kg)	比率(%)	収量(kg)	比率(%)	収量(kg)	比率(%)	収量(kg)	比率(%)
全県	554	435	78.5	517	14.8	532	2.8	541	1.6	554	0.9
県北	530	417	78.7	493	14.4	508	2.8	517	1.7	530	0.9
中央	548	410	74.9	505	17.3	524	3.4	534	1.9	548	0.9
県南	571	464	81.2	537	12.9	551	2.4	559	1.4	571	0.8



作柄表示地帯別作柄概況

区分	平 年 比 較				
	作柄の良否	穂数の多少	1穂当たり 籾数の多少	全籾数の 多少	登熟の良否
秋 田	やや不良	やや少ない	やや多い	やや少ない	平年並み
県北	不良	少ない	多い	平年並み	やや不良
中央	不良	少ない	やや多い	やや少ない	やや不良
県南	やや不良	やや少ない	やや多い	平年並み	平年並み

令和4年12月9日、東北農政局

— 秋田県の1等米比率90.0% —

東北農政局秋田県拠点令和4年10月31日現在

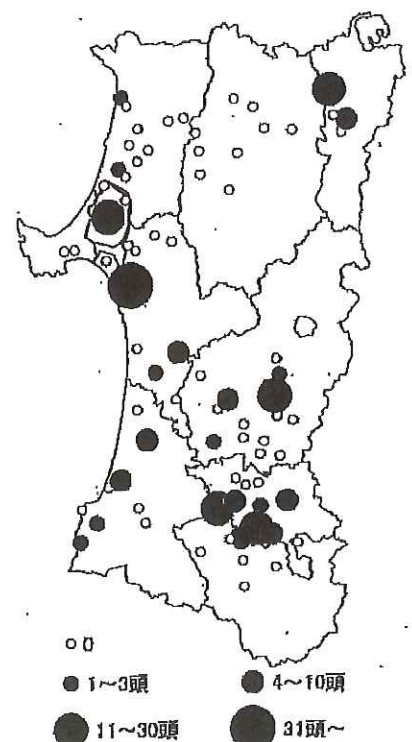
農林水産省は11月30日に発表した、令和4年産米の本県の1等米比率(10月末現在、水稻うるち玄米)は90.0%であった。昨年の同時期に比較すると0.5ポイント減となっている。銘柄別の1等米比率は、あきたこまち90.6%、めんこいな89.9%、ひとめぼれ95.1%、ゆめおぼこ90.4%、今年から本格的に作付けされたサキホコレは検査数量が2,625トンと少ないが98.1%で高水準となっている。東北全体の1等米比率は93.9%、全国は79.4%であると発表した。本県の2等米比率は7.9%、3等米は0.7%、規格外は1.4%であった。2等以下に格付けされた理由として最も多かったのは、未熟粒等の形質が41.4%、カメムシ等による着色粒が36.8%、次いで整粒不足が16.2%であった。

令和4年産米1等米比率

東北農政局秋田県拠点

(令和4年10月31日現在)

		検査等級比率(%)			
		1等	2等	3等	規格外
令和4年産全県		90.0	7.9	0.7	1.4
令和3年産同時期		90.5	7.4	0.8	1.2
品 種	あきたこまち	90.6	7.5	0.5	1.4
	めんこいな	89.9	9.4	0.6	0.1
	ひとめぼれ	95.1	4.5	0.4	0.0
	ゆめおぼこ	90.4	8.9	0.7	0.0
	サキホコレ	98.1	1.0	0.0	0.9
参 考	東 北	93.9	5.3	0.4	0.4
	全 国	79.4	17.8	1.9	0.9



水田内におけるカメムシ類のすくい取り数
(令和4年8月第1半旬調査、病害虫防除所)

10a当たり平均収量541kg、平年比93%

穂数少なく、1穂粒数多く、m²当たり粒数やや少ない

6月上・中旬の低温・寡照と8月の大雨・極度の日照不足が影響

地域振興局農林部農業振興普及課定点調査

各地域振興局農林部農業振興普及課定点ほ場の収量調査の結果では、全県平均でみると、収量は541kg(平年比93%)、全重は1,433kg(同97%)、精粳重は725kg(同95%)、登熟歩合は82.7%(平年差-3.7)、千粒重22.8g(平年比101%)となっている。

収量を左右した要因は精粳重の減少によるもので、これは穂数が極端に少なく(平年比88%)、総粒数の減少が反映したものと推察される。8月中・下旬は大雨と極度の日照不足により、登熟が緩慢に推移し、刈り取りを控えた地域が多かった。このことから充実度不足や青未熟粒が多く見られたことと、刈り遅れによる胴割れ粒が発生した。

農業振興普及課定点調査結果

(令和4年10月25日調査、品種:あきたこまち)

農 業 振 興 普 及 課	調 査 点 数	全 重		ワ ラ 重		精 粳 重		玄 米 重		登 熟 歩 合		千 粒 重	
		(kg/10a)	平年比	(kg/10a)	平年比	(kg/10a)	平年比	(kg/10a)	平年比	(%)	平年差	(g)	平年比
鹿 角	5	1,362	87	622	85	727	93	564	96	88.4	0.7	22.9	102
北秋田	9	1,401	94	699	98	685	90	526	88	85.6	-2.2	22.3	99
山 本	9	1,434	97	657	96	763	98	549	93	80.7	-5.7	22.9	102
県 北	23	1,406	94	666	94	724	94	543	92	84.3	-2.3	22.7	101
秋 田	10	1,480	101	729	107	724	98	533	95	80.6	-6.8	22.8	102
由 利	2	1,565	113	753	121	795	107	579	105	84.3	-2.7	22.2	98
中 央	12	1,494	103	733	109	736	100	540	96	81.3	-6.0	22.7	102
仙 北	10	1,328	90	619	90	667	88	491	83	77.8	-7.9	23.2	102
平 鹿	11	1,472	102	734	115	732	96	559	98	86.0	0.1	22.8	102
雄 勝	8	1,494	104	690	112	773	101	573	99	82.1	-4.1	22.8	102
県 南	29	1,428	98	682	105	721	95	540	93	82.1	-3.8	22.9	102
全 県	64	1,433	97	686	102	725	95	541	93	82.7	-3.7	22.8	101

有効茎歩合高いが穂数少ない

1穂粒数やや多く、総粒数やや少なく、登熟歩合低下

地域振興局農林部農業振興普及課定点調査

各地域振興局農林部農業振興普及課の定点ほ場における成熟期(9月15日)の調査結果では、全県平均でみると、稈長は85.1cm(平年比105%)、穂長は18.2cm(同104%)、穂数は399本/m²(同88%)、1穂粒数は77.6粒(同111%)、総粒数30.9千粒/m²(同98%)となっている。総粒数が少ないのは、6月上・中旬の低温・寡照により、目標の茎数が確保されなかったことによる穂数不足が大きな要因である。6月下旬～7月は高温・多照で経過し、溝掘り・中干しが十分に行えたことにより、1穂粒数の増加になったが総粒数は平年を下回った。出穂は平年より1日早い8月1日、出穂前後は高温・多照に恵まれ初期登熟は順調に推移した。しかし、8月中・下旬の大雨と極度の日照不足により、登熟が緩慢になり登熟歩合は低下したが、千粒重はほぼ平年並みであった。

初期莖数不足が致命的な要因

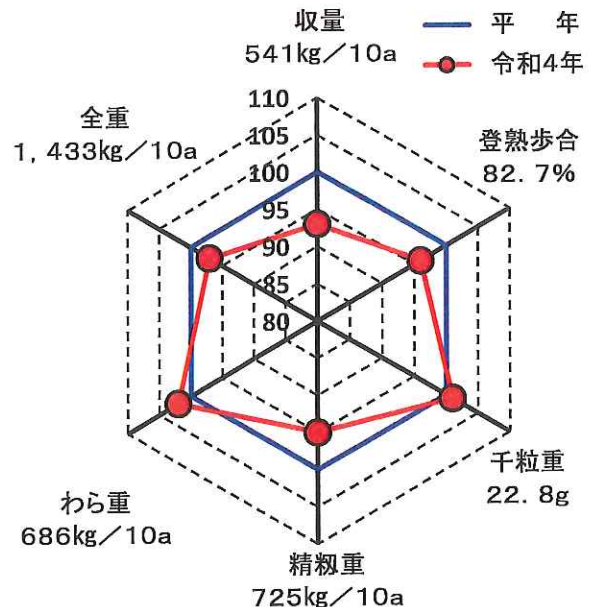
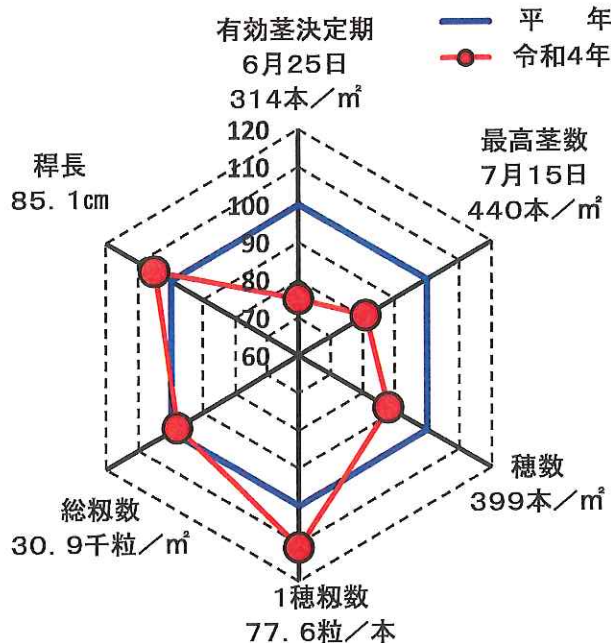
生育遅延型冷害の様相、稲づくりの基本技術再確認

地域振興局農林部農業振興普及課定点調査

農業振興普及課定点調査結果

(令和4年9月15日調査、品種:あきたこまち)

農業 振興 普及課	調査 点数	成熟期		稈長(cm)		穂長(cm)		穂数		1穂当たり粒数		㎡当たり総粒数	
		本年	平年差	本年	平年比	本年	平年比	本年	平年比	本年	平年比	本年	平年比
		月、日	日	(cm)	(%)	(cm)	(%)	(本/㎡)	(%)	(粒)	(%)	(千粒)	(%)
鹿角	5	9.18	0	79.1	101	16.7	99	416	86	69.2	105	28.6	90
北秋田	9	9.17	3	81.5	101	18.0	104	401	86	74.0	109	29.6	93
山本	9	9.20	4	83.2	104	18.5	105	380	84	81.9	116	30.9	97
県北	23	9.18	2	81.6	102	17.9	103	396	85	76.1	111	29.9	94
秋田	10	9.16	2	83.9	103	18.4	103	384	88	82.8	114	31.7	101
由利	2	9.24	5	85.1	108	18.6	106	380	87	81.1	119	30.6	104
中央	12	9.17	3	84.1	104	18.4	103	383	88	82.5	115	31.5	101
仙北	10	9.20	6	85.6	106	18.3	104	391	87	75.7	110	29.5	96
平鹿	11	9.21	4	92.3	111	18.2	102	409	91	78.1	108	31.9	99
雄勝	8	9.17	0	86.3	107	18.5	106	429	96	76.8	111	32.9	107
県南	29	9.20	4	88.3	108	18.3	104	408	81	76.9	109	31.4	100
全県	64	9.19	3	85.1	105	18.2	104	399	88	77.6	111	30.9	98



気象統計値(秋田市)

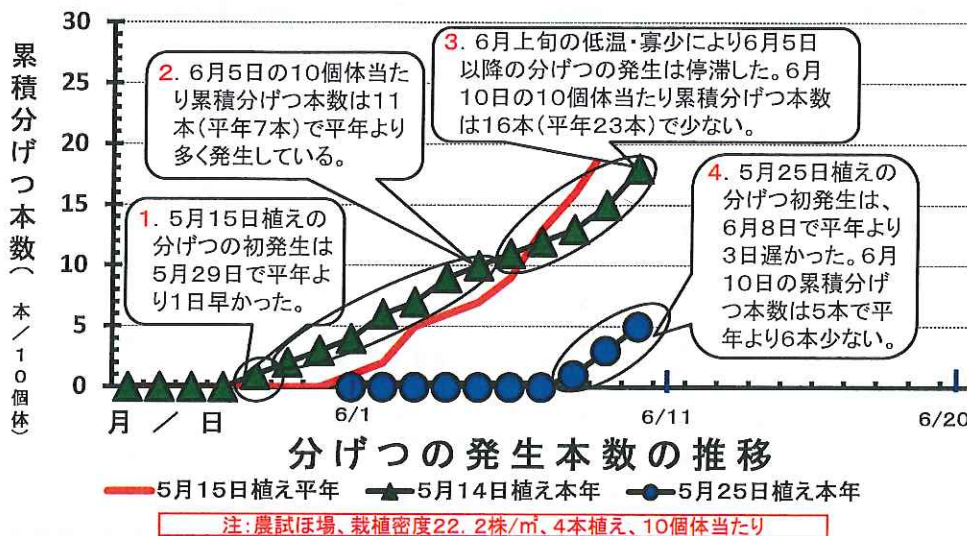
秋田地方気象台 令和4年7月1日

月	旬	気温(°C)			降水量(mm)			日照時間(h)		
		平均(°C)	平年差(°C)	階級区分	降水量(mm)	平年比(%)	階級区分	積算(h)	平年比(%)	階級区分
6月	上旬	16.0	-2.4	かなり低い	47.0	198	多い	54.7	80	少ない
	中旬	19.4	-0.2	平年並み	19.5	47	少ない	58.9	102	平年並み
	下旬	23.5	+2.8	かなり高い	76.0	131	多い	26.5	50	少ない
	月	19.6	0.0	平年並み	142.5	116	多い	140.1	78	少ない

6月の気象概況(秋田市)

秋田地方気象台 令和4年7月1日

6月	上旬	この期間、気圧の谷や低気圧の影響で曇りや雨の日が多く、雷雨となつたところもあった。このため県の南部や内陸を中心に日照時間が少なく、気温も全県で低く経過した。
	中旬	この期間、旬の初めは高気圧に覆われて晴れた日が多かったが、半ば以降低気圧や気圧の谷の影響で曇りや雨の日が多くなった。
	下旬	この期間、旬の初めは高気圧に覆われて晴れたが、24日以降は曇りや雨の日が多く、24日には前線を伴った低気圧の影響で、また、27日から30日にかけては、気圧の谷や前線等の影響で大雨となつた所もあった。
	月	この期間、高気圧に覆われて晴れた日もあったが、気圧の谷や低気圧、前線等の影響で曇りや雨の日が多く、24日以降は大雨となつた所もあり、陣場、藤原、脇神で月降水量が6月として1位を記録した。また、気温は上旬は寒気の影響で低かったが、下旬は暖かい空気に覆われたため高くなり、25の地点で最低気温が6月としては高い方から一位となつた。



登熟中・後期、大雨・極度の日照不足
登熟緩慢、充実度不足と青未熟粒目立つ、胴割れ粒懸念
— 稲刈りの始期(5%)・盛期(50%)は平年並み、終期(95%)は6日遅れ —

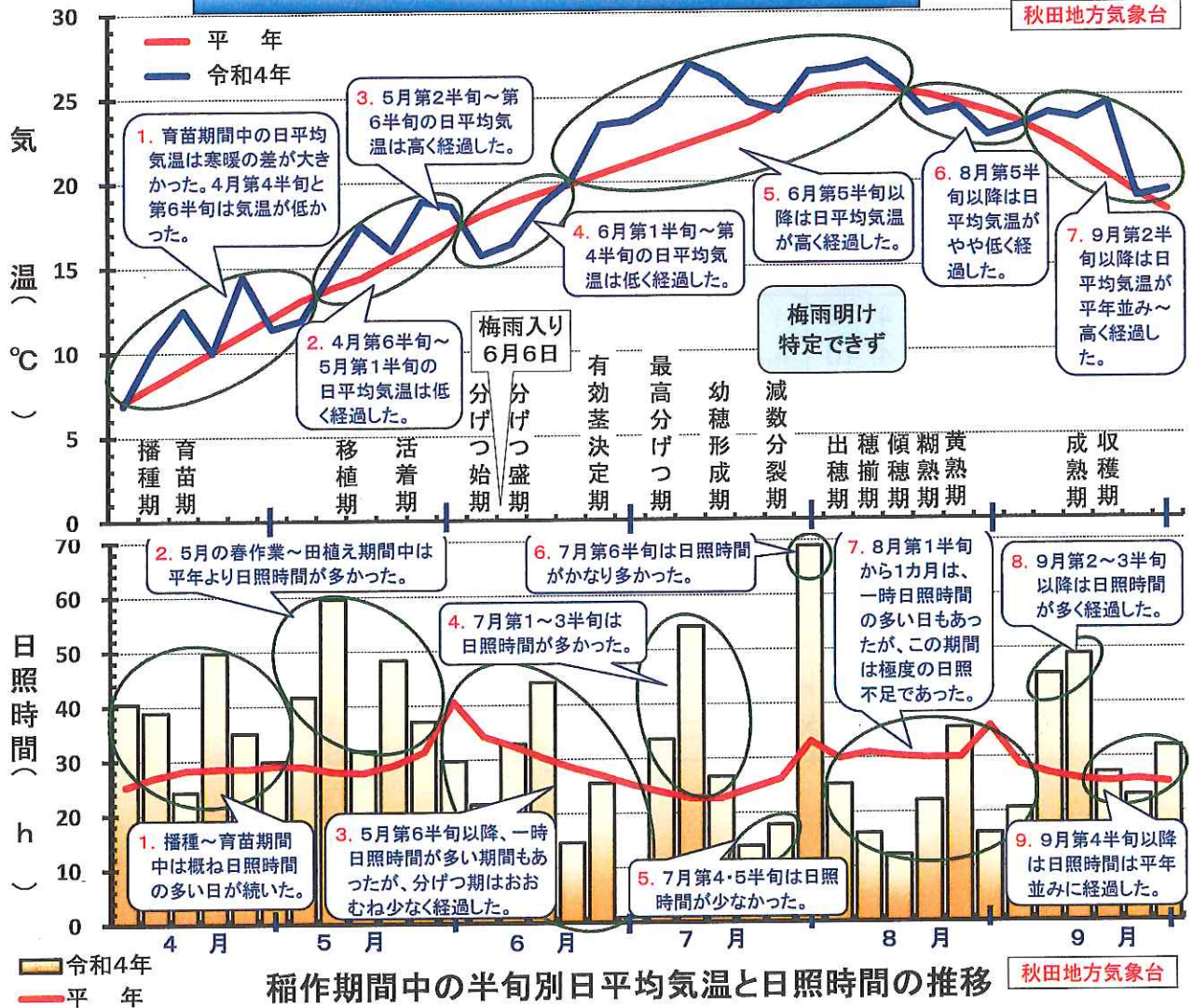
刈り取りの進捗状況

秋田県農林水産部水田総合利用課

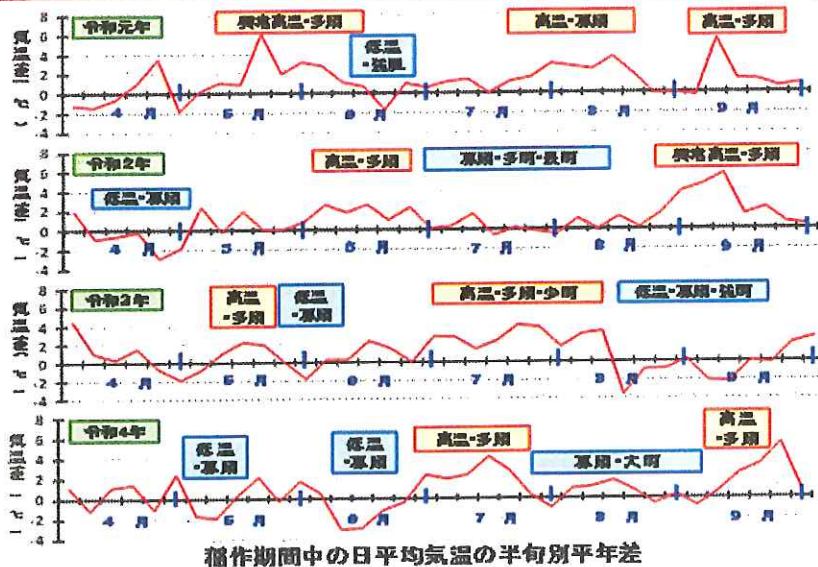
地域振興局	作付け面積(ha)	始期(5%)		盛期(50%)		10月15日(%)※		終期(95%)	
		本年	平年差	本年	平年差	本年	平年	本年	平年差
鹿角	2,186	9月27日	0	10月9日	0	72.7	79.1	10月23日	1
北秋田	6,875	9月21日	-1	10月2日	1	85.1	96.4	10月22日	8
山本	8,766	9月22日	2	10月2日	2	94.4	97.4	10月16日	5
県北	17,827	9月21日	-1	10月2日	1	88.2	94.8	10月20日	4
秋田	22,465	9月18日	-1	9月30日	2	88.5	97.8	10月21日	9
由利	8,170	9月21日	-1	10月2日	1	90.2	96.8	10月18日	4
中央	30,635	9月20日	0	10月1日	1	88.9	97.5	10月19日	6
仙北	19,340	9月21日	1	9月30日	1	95.0	98.1	10月15日	5
平鹿	11,100	9月25日	2	10月3日	2	96.8	98.0	10月13日	2
雄勝	5,867	9月19日	-4	9月30日	-2	97.2	95.8	10月13日	2
県南	36,307	9月21日	0	10月1日	0	95.9	97.7	10月15日	4
全県	84,769	9月20日	-1	10月1日	0	91.8	97.0	10月19日	6

※: 10月25日の刈り取り面積(刈り取り面積/作付面積×100)

稲作期間中の気象と生育概況



令和に入ってから温暖化とともに気象変動が大きくなった



生育概況

1. 育苗期(4月)

4月の日平均気温(10.9℃)は平年より+1.3℃高く、日照時間(平年比130%)はかなり多かった。播種作業の盛期(50%)は4月21日(平年差-1)で平年並となった。また、施肥・耕起などの春作業も順調に進み平年(5月3日)より2日早かった。

農作業の進捗状況

各地域振興局農林部農業振興普及課調査(令和4年6月1日)

項目	地域	始期(5%)			盛期(50%)			終期(95%)		
		本年	平年	差	本年	平年	差	本年	平年	差
播種	県北	4. 13	4. 13	0	4. 19	4. 18	1	4. 27	4. 26	1
	中央	4. 10	4. 11	-1	4. 18	4. 18	0	4. 27	4. 28	-1
	県南	4. 18	4. 20	-2	4. 24	4. 25	-1	4. 30	4. 30	0
	全県	4. 11	4. 11	0	4. 21	4. 22	-1	4. 30	4. 30	0
耕起	県北	4. 21	4. 22	-1	4. 30	5. 2	-2	5. 6	5. 10	-4
	中央	4. 12	4. 17	-5	4. 23	4. 29	-6	5. 6	5. 9	-3
	県南	4. 29	4. 30	-1	5. 5	5. 6	-1	5. 12	5. 14	-2
	全県	4. 15	4. 20	-5	5. 1	5. 3	-2	5. 11	5. 12	-1
田植	県北	5. 13	5. 15	-2	5. 21	5. 22	-1	5. 28	5. 28	0
	中央	5. 8	5. 11	-3	5. 19	5. 19	0	5. 29	5. 29	0
	県南	5. 14	5. 17	-3	5. 23	5. 24	-1	5. 30	5. 31	-1
	全県	5. 11	5. 13	-2	5. 22	5. 23	-1	5. 30	5. 30	0

苗の生育は、苗丈がやや長く(平年比103%)、葉数は平年より進み(平年差+0.4葉)、乾物重(平年比126%)が重く、充実度(同122%)は平年を上回った。

農業試験場気象感応試験における5月16日植えの、田植え後10日間の平均気温は15.6℃(平年差+0.1℃)であった。せん根苗の発根調査では、平均発根数は13.1本(平年比96%)、平均発根長は6.6cm(同125%)で、発根数が平年よりやや少なく発根長は平年より長かった。

5月中旬は、移動平均気温が平年より高く経過したこと、発根量(根数×根長)は86.1cm・本、平年比118%であった。5月第6半旬後半は日移動平均気温がやや低くなっているが、活着は順調に進んだ。(作況ニュース第2号)

せん根苗による発根調査結果

調査項目	年次		平年比 %・差※
	4年	平年	
平均気温(℃)	15. 6	15. 5	+0. 1※
平均発根数(本);A	13. 1	13. 6	96
平均発根長(cm);B	6. 6	5. 3	125
最長根長(cm)	11. 9	9. 8	121
発根量(cm・本);A×B	86. 1	73. 0	118
発根乾物重(g);C	0. 40	0. 30	128
地上部乾物重(g);D	1. 30	1. 30	102
発根率(%);C/D×100	31. 2	24. 1	+7. 1※

注1: 平年値: 平成12年～令和3年の平均

注2: 地上部乾物重は30個体の重さ



育苗

2. 移植期(5月)

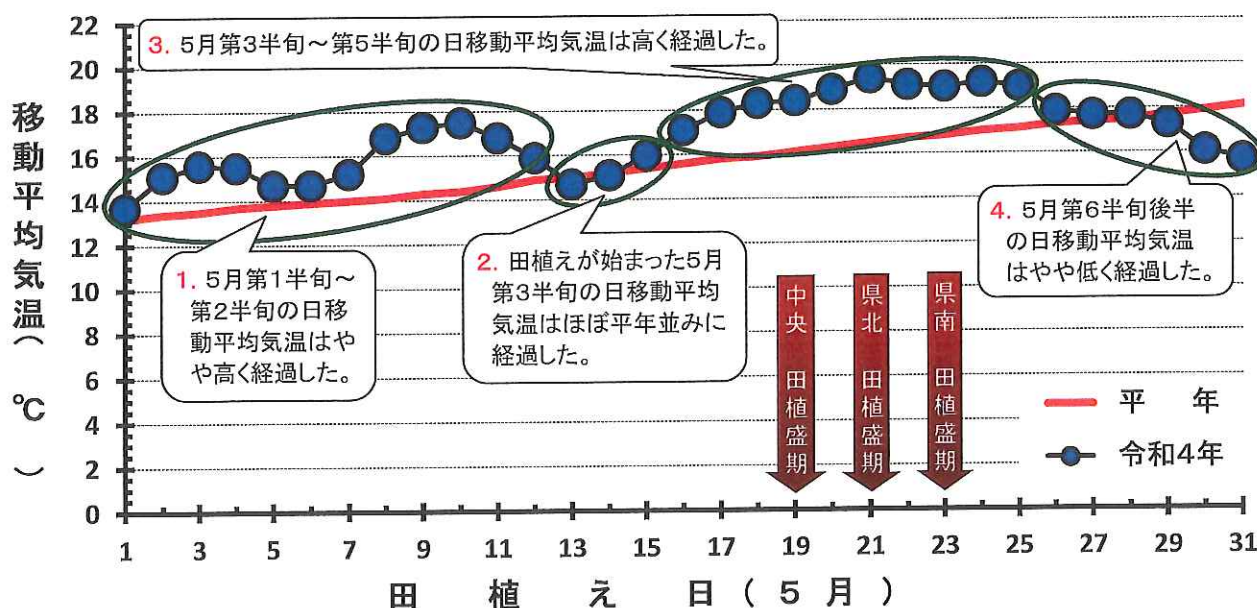
5月は、日平均気温(16.4℃)が平年に比べ+1.2℃で高かったが、5月上旬の日平均気温は平年より-0.3℃低かった。また、5月の日照時間は平年の140%でかなり多く、降水量は平年の69%で少なかった。

全県の田植え盛期(50%)は5月22日、終期(95%)は5月30日で平年並みとなった。5月下旬は前線と低気圧の影響により低温となり、一時田植えを見合わせた期間があった。この時期に田植えを行った沿岸部の一部地域で代枯れや活着不況がみられた。

(作況ニュース第3号)



田植え



田植え日翌日から5日間の移動平均気温

注: 本年は秋田アメダスデータの平均気温を使用。平年値は準平年値を使用

3. 分けつ期(6月)

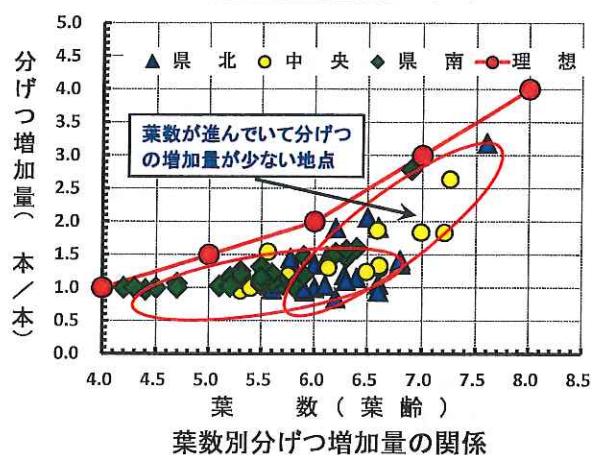
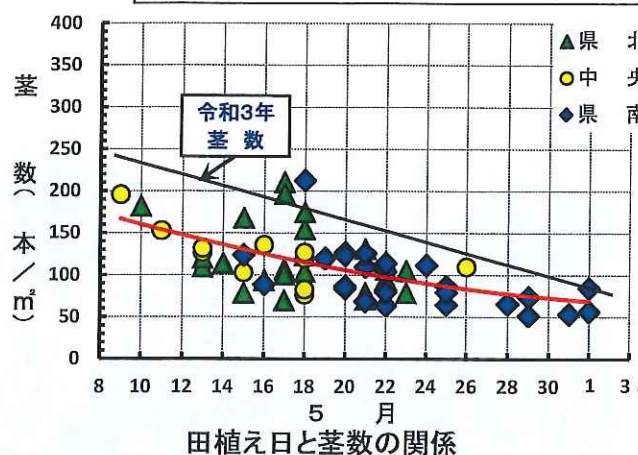
6月の日平均気温(19.6℃)は平年並みであった。日照時間(78%)は平年に比べ少なく、降水量(116%)は平年よりやや多かった。「梅雨入り」は平年並みの6月15日と発表された。

分けつ始期(6月10日)の生育は、5月下旬から続いた低温と日照不足・寡照により、草丈は24.3cm(平年比95%)、㎡当たり茎数は109本(同69%)で極端に少なく、葉齢は5.9葉(平年差-0.2)であった。(作況ニュース第3号)



活着

地域振興局農林部農業振興普及課定点調査ほ場6月10日の生育解析



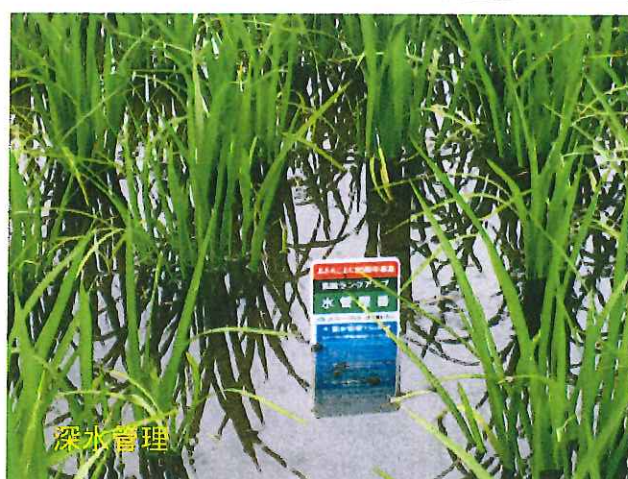
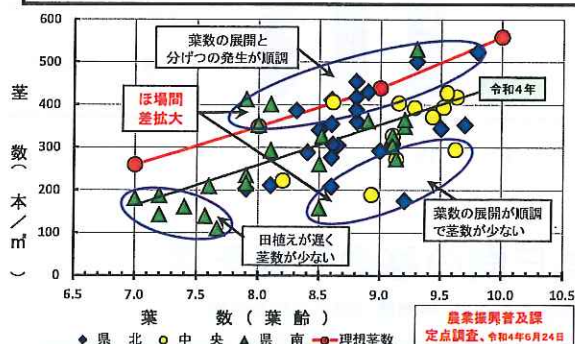
地域振興局農林部農業振興普及課定点調査ほ場6月24日の生育

有効茎決定期(6月24日)の生育は、草丈は32.6cm(平年比88%)、 m^2 当たり茎数は314本(同75%)、葉齢8.6葉(平年差-0.1葉)で、草丈が短く茎数が極端に少なく経過した。とくに、5下旬以降に田植えを行った一部の地域では、生育の遅れが目立った。(作況ニュース第4号)

各地域振興局農業振興普及課の定点調査 令和4年6月24日

普及指導課	調査点数	草丈		m^2 当たり茎数		葉数		葉色計値	
		本年	平年比	本年	平年比	本年	平年差	本年	平年比
		(cm)	(%)	(本)	(%)	(葉)	(葉)		(%)
鹿角	5	29.2	78	341	67	8.6	-0.2	45.9	101
北秋田	9	34.8	87	345	68	8.9	-0.1	45.3	103
山本	9	34.7	94	339	82	8.9	0.1	47.6	109
秋田	10	37.0	94	353	84	9.2	0.3	48.6	111
由利	2	29.5	89	302	84	8.1	0.0	44.1	106
仙北	10	30.8	86	318	75	8.5	0.1	46.0	106
平鹿	11	29.3	84	230	68	7.8	-0.6	42.1	97
雄勝	8	32.0	88	296	77	8.3	-0.3	44.7	99
県北	23	33.5	88	342	73	8.8	-0.1	46.3	105
中央	12	35.7	94	345	85	9.0	0.2	47.8	110
県南	29	30.6	86	279	73	8.2	-0.3	44.2	101
全県	64	32.6	88	314	75	8.6	-0.1	45.6	104
6月25日の生育目標値	県北	34.0		428		8.5		42.0	
	中央	36.0		431		8.6		45.0	
	県南	34.0		346		8.4		43.0	

葉数別と有効茎決定期(6月24日)の茎数

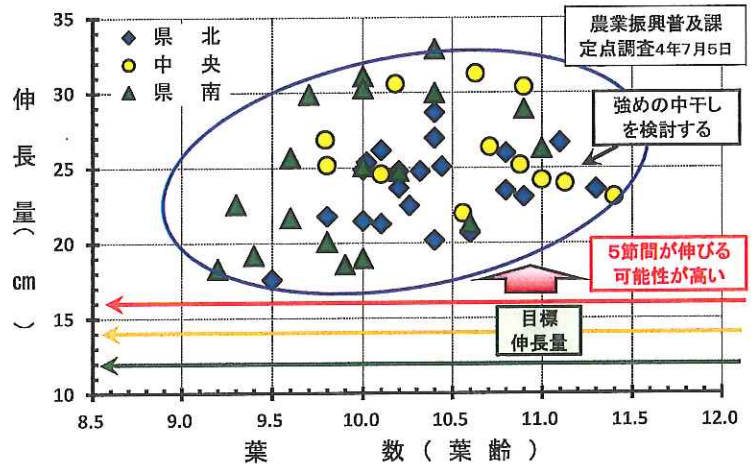


4. 最高分げつ期～減数分裂期(7月)

7月の日平均気温(25.6℃)は平年に比べかなり高く(+2.2℃)推移した。日照時間(215.3h)は平年の143%でかなり多く、降水量は平年より(平年比31%)かなり少なかった。

最高分げつ期(7月5日)の生育は、草丈が57.6cm(平年比116%)、 m^2 当たり茎数403本(同74%)、葉緑素計値47.0(同107%)、葉齢10.3(平年差+0.3葉)であった。ここに来て、草丈が急速に伸び、茎数は依然として少なく、葉色が濃く経過した。

右図は、最高分げつ期(10葉期・7月5日)の草丈から有効茎決定期(9葉期・6月25日)の草丈を差し引いた伸長量と葉数の関係を示している。この時期の草丈は第5節間が伸長する時期に当たるので、10葉の葉身が伸びると倒伏の危険性が高まる。10葉期の伸長量がおおよそ14cm以下であれば倒伏の心配はなく、16cmを超えると倒伏の危険性が高まる。本年は伸長量が多いので倒伏には注意が必要である。ただし、過去にこのような生育を辿った年は、減葉して稈長が短くなる場合があるので一つの目安にする。また、「あきたこまち」の場合、第5節間長と第4節間長を足して14cm以上になれば倒伏の危険性が高まるので強めの中干しを行う。



幼穂形成期(7月15日)の生育

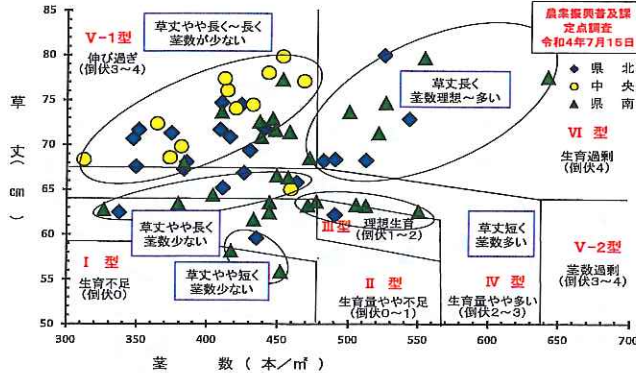
各地域振興局農業振興普及課の定点調査

令和4年7月15日

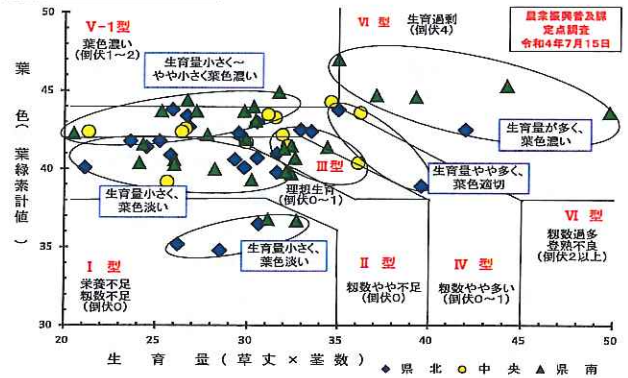
普及指導課	調査点数	草丈		m^2 当たり茎数		葉数		葉緑素計値	
		本年 (cm)	平年比 (%)	本年 (本)	平年比 (%)	本年 (葉)	平年差 (葉)	本年	平年差 (%)
鹿角	5	67.3	111	471	79	11.5	0.5	42.1	100
北秋田	9	70.1	111	434	75	11.6	0.4	39.5	98
山本	9	69.2	111	397	73	11.6	0.5	41.5	99
秋田	10	74.8	116	410	82	12.0	0.7	42.6	104
由利	2	66.9	115	416	84	11.1	0.5	40.5	97
仙北	10	68.1	109	439	81	11.3	0.4	40.0	96
平鹿	11	66.3	105	488	91	11.2	0.2	43.4	100
雄勝	8	69.5	111	456	84	11.5	0.4	42.7	97
県北	23	69.1	111	427	75	11.6	0.5	40.9	99
中央	12	73.5	116	411	82	11.8	0.7	42.3	103
県南	29	67.8	108	462	85	11.3	0.3	42.0	98
全県	64	69.3	111	440	81	11.5	0.4	41.7	99

幼穂形成期(7月15日)の生育は、草丈が69.3cm(同年比111%)、 m^2 当たり茎数440本(同81%)、葉緑素計値41.7(同99%)、葉齢11.5(同年差+0.4葉)であった。葉色は同年並みになったものの、茎数が少なく草丈が長いことから倒伏が心配された。

生育診断

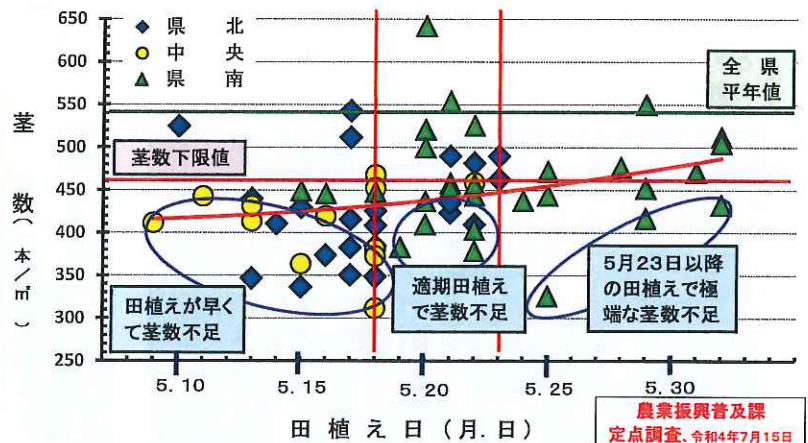


栄養診断



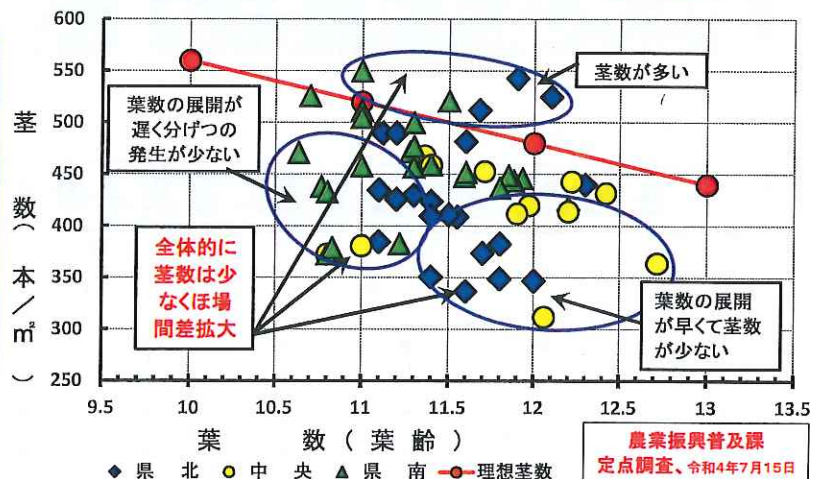
田植え日と茎数

7月15日(幼穂形成期)の茎数と田植え日の関係では、5月18日～23日を境にして茎数確保に差がある。同じ田植え日でも栽植密度、施肥法、肥料形態、土壌の還元によって生育量が異なることから、ほ場毎に生育・栄養診断を行って水管理を中心に対応する。



葉数と茎数

7月15日(幼穂形成期)の茎数を葉数別に見ると、葉数別目標茎数の±5%に入っているほ場は全体の約40%で、茎数の少ないほ場が大多数を占めている。こうしたほ場では、これまで確保した茎数を維持する飽水管理を行って一茎の充実を図る。葉数が進んでいて茎数が不足しているほ場では、減数分裂期に生育・栄養診断を基に追肥を判断する。



減数分裂期(7月25日)の生育は、草丈が79.4cm(同年比107%)、 m^2 当たり茎数425本(同85%)、葉緑素計値39.6(同102%)、葉齢12.6(同年差+0.4葉)であった。

最高分けつ期から減数分裂期にかけて高温・多照で経過し、適度な降水に恵まれ、溝掘りや中干しによる水管理が徹底された。穂肥と実肥は草丈が長いことから追肥を控えたほ場が多かった。こうした高温・多照は斑点米カメムシ類の生息密度が高まり、注意報が出されるなど、防除の徹底と草刈りの実施を呼びかけた。(作況ニュース第5号・第6号)

地域振興局農林部農業振興普及課定点調査ほ場7月25日の生育

各地域振興局農林部農業振興普及課の定点調査 令和4年7月25日											
地域	調査 点数	草丈		㎡当り茎数		葉数		葉緑素計値		出穂期	
		本年	平年比	本年	平年比	本年	平年差	本年	平年差	本年	平年差
		(cm)	(%)	(本)	(%)	(葉)	(葉)		(%)	月/日	日
鹿角	5	75.0	105	455	85	12.6	0.4	37.2	98	8/4	0
北秋田	9	78.3	106	398	77	12.7	0.2	38.8	101	8/3	0
山本	9	79.1	108	398	79	12.7	0.3	39.9	107	8/1	-1
秋田	10	85.0	111	402	88	12.9	0.5	39.7	107	8/2	1
由利	2	79.3	113	417	89	12.2	0.5	38.6	102	8/3	-1
仙北	10	76.8	105	423	85	12.4	0.4	38.4	103	8/1	-1
平鹿	11	79.5	107	469	91	12.4	0.1	42.0	107	8/3	-1
雄勝	8	80.1	108	439	87	12.5	0.2	39.8	101	7/31	-4
県北	23	77.9	107	410	79	12.7	0.3	38.9	103	8/3	0
中央	12	84.1	112	405	88	12.8	0.5	39.5	104	8/2	0
県南	29	78.7	106	445	88	12.4	0.3	40.2	101	8/2	-1
全県	64	79.4	107	425	85	12.6	0.4	39.6	102	8/2	-1

5. 出穂期(8月上旬)

6月下旬から8月上旬まで続いた高温・多照は生育を早め、あきたこまちの出穂期は8月1日(平年比-1)を迎えた。(作況ニュース特号)

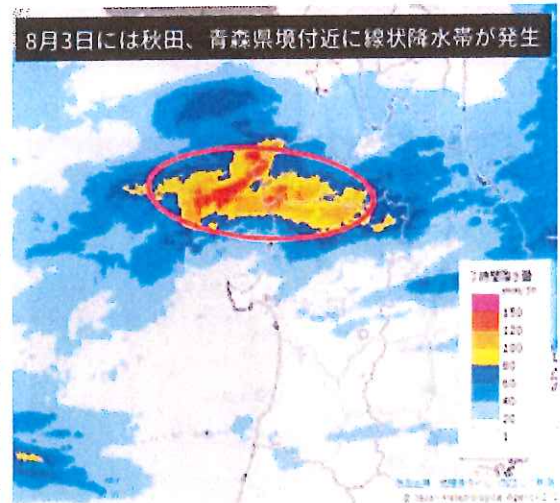
東北農政局秋田拠点が発表した作柄概況では、水稻全品種の平均出穂最盛期(50%)は8月3日ではほぼ平年並みとなった。



6. 登熟期(8月中旬～)

8月の日平均気温(25.0℃)は平年並み(平年差+0.0℃)に推移した。日照時間(127.4h)は平年比68%と少なく、降水量(334.0mm)は平年比181%でかなり多かった。8月第2半旬～6半旬かけて、前線や低気圧の影響により1時間降水量が通年の1位を観測するなど記録的な大雨となった。

「非常に激しい雨」過去最多 1時間降水量50㎜以上、今夏9回観測



8月19日の生育は、 m^2 当たり穂数は399本(平年比88%)、1穂当たり着粒数は82.5粒(同114%)、 m^2 当たり総粒数は32.8千粒(同100%)であった。登熟は8月の日平均気温は平年並みに推移ものの日照時間が極端に少なく、登熟歩合、粗玄米千粒重、粗玄米重が一時鈍化し、登熟は緩慢に推移している。(作況ニュース第7号)

農業振興普及課定点調査結果									
(令和4年8月19日調査、品種:あきたこまち)									
農 業 振 興 普 及 課	調 査 点 数	出穂期		穂数		着粒数			
		本年	平年差	m^2 当たり		1穂当たり		m^2 当たり	
		(日)	日	(本)	(%)	(粒)	(%)	(千粒)	(%)
鹿 角	5	8月2日	0	414	85	78.3	117	32.4	100
北秋田	9	7月31日	0	403	86	81.2	117	32.5	100
山 本	9	8月2日	0	380	84	89.2	120	33.8	101
県 北	23	8月1日	0	396	85	83.7	118	33.0	100
秋 田	10	7月30日	-1	380	87	88.5	119	33.6	104
由 利	2	8月2日	0	391	89	83.5	116	32.5	104
中 央	12	7月30日	-1	382	88	87.7	119	33.4	104
仙 北	10	8月2日	0	390	86	77.3	106	30.0	92
平 鹿	11	8月5日	1	409	91	80.6	107	32.9	98
雄 勝	8	8月1日	-2	429	96	80.5	112	34.4	107
県 南	29	8月1日	0	408	91	79.5	108	32.3	99
全 県	64	8月1日	-1	399	88	82.5	114	32.8	100

7. 適期刈り取り

県水田総合利用課では、稲刈りの最盛期(50%)は10月3日頃がピークと見込んでいる。刈り取りについては、① 田植え日から出穂日を予測する。② 早晩生により登熟日数を選択する。③ 積算気温を算出する。④ 積算日照時間を算出する。⑤ 主茎穂の上位3~4番目の2次枝梗の黄化度を確認する。とくに、本年は8月が極端な日照不足で経過しており、登熟の進み具合をよく観察して刈り取り適期を見極めてほしいとしている。



8. 市町村別生産量

東北農政局は12月20日に令和4年産米の市町村別平均反収と収穫量を発表した。平均反収は全市町村で前年を下回り、10a当たり21～57kgの減収であった。10a当たりの収穫量が最も多かったのは横手市の586kgで、大仙の573kg、美郷町の570kgと続いた。東北農政局秋田県拠点の6月の低温と日照不足、8月の大雨と極度の日照不足が影響したと発表した。主食用などの作付面積が最大であったのは、大仙市の11,500ha、次いで横手市の10,900ha、大潟村の9,830haとなり、県全体では82,400haであった。収穫量は県全体で前年より44,700t少ない456,500tであった。

令和4年産市町村別平均反収と収穫量

市町村名	作付面積 (ha)	収 量 10a当たり	収 穫 量 (t)	市町村名	作付面積 (ha)	収 量 10a当たり	収 穫 量 (t)
秋 田 県	82,400	554	456,500	仙 北 市	2,850	531	15,000
秋 田 市	5,140	554	28,500	小 坂 町	182	505	919
能 代 市	3,980	546	21,700	上小阿仁村	299	501	1,500
横 手 市	10,900	586	63,900	藤 里 町	388	524	2,030
大 館 市	3,300	518	17,100	三 種 町	3,250	545	17,700
男 鹿 市	2,480	553	13,700	八 峰 町	1,140	544	6,200
湯 沢 市	3,500	557	19,500	五城目町	1,080	525	5,670
鹿 角 市	1,940	527	10,200	八郎潟町	554	543	3,010
由利本荘市	6,140	549	33,700	井 川 町	882	535	4,720
潟 上 市	2,170	546	11,800	大 潟 村	9,830	549	54,000
大 仙 市	11,500	573	65,900	美 郷 町	4,150	570	23,700
北 秋 田 市	2,770	502	13,900	羽 後 町	2,020	569	11,500
に か ほ 市	1,850	530	9,816	東成瀬村	162	513	831

9. 病害虫の発生

病害虫防除所が8月上旬に調査した結果では、穂いもちの発病株率と発病地点率は平年並みであった。

斑点米カメムシ類は、6月中旬から8月上旬まで高温・多照で経過したことから、水田内のすくい取りの発生地点率は平年に比較していずれも多かった。このため、県では注意報を発令した。



カメムシのすくい取り

10. まとめ

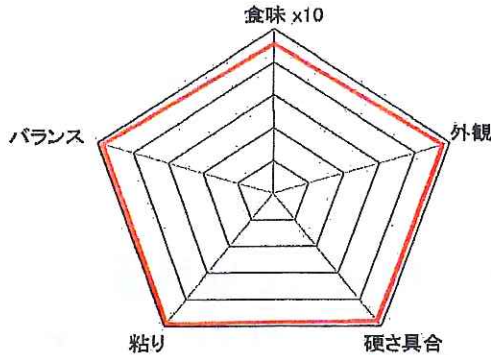
今年の気象は、播種から刈り取りまで気象変動が非常に大きかった。5月下旬～6月中旬の低温と日照不足、8月の大雨と極度の日照不足など観測史上記録的な気象で経過した。本年は、あきたこまちが誕生して38年、サキホコレの本格デビューを迎え、過去に経験したことのない生育を辿ってきた。8月15日の作柄は「やや不良」が見込まれるものの、こうした天候にもかかわらず、生産者の弛まない努力により、集荷された玄米の品質は良好で炊き上がりは「粘り」があって「うま味」が凝縮され、自信を持って消費者にお届けできるおコメに仕上がっている。

炊飯食味計 分析結果【出荷製品】

整理No. 00027981

日付 2022年09月28日(水)

年産 4
産地 秋田
品種 あきたこまち
水分 13.9 %
白度 46.9 %
精米日 9.26
備考 調査品



STA
外観 9.6
硬さ 4.8
粘り 9.8
バランス 9.7
食味 91



美味しい「あきたこまち」コンテスト食味試験結果

令和4年12月7日

パネラー101名

	総合	外観	香り	味	粘り	硬さ
基準: 長野コシ	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000
赤 つや姫	0.545	0.503	0.297	0.376	-0.238	0.416
青 こまちR	0.267	0.327	0.139	0.149	-0.188	0.267
黄 サキホコレ	0.564	0.257	0.248	0.386	0.495	-0.287
緑 最優秀賞	0.506	0.307	0.229	0.383	0.218	0.040

有意差検定 緑 : +99%水準 黄 : +95%水準 赤 : -99%水準 青 : -95%水準

令和5年の稲づくりに向けて

令和4年の収量低下要因

あきたこまちコンテストの結果を踏まえて

気象的要因: 大

- ① 温暖化: 新たな水管理 → 飽水管理
- ② 日照不足: 地温較差 → 飽水管理
- ③ 生育制御: 溝掘り → 中干し → 飽水管理

低温と還元

平年作確保: 約20%

初期莖数の確保

穂数確保

適正1穂初数確保

登熟向上

- ① 施肥: パースト側条
全層 + 側条の組み合わせ
速効性肥料中心
- ② 栽植密度: 70株
- ③ 苗 質: 中苗が安定、播種量遵守
- ④ 異常還元: 稲ワラの分解促進 → 透水性の促進
代かきの再確認
秋すき込み
- ⑤ 土づくり肥料の施用: ケイカル80~100kg/10a
(コンテストの優良事例) ケイ酸カリ20~30kg/10a

優良事例

- ① 秋落ち現象の回避
- ② 養水分の供給

倒伏したほ場とワラが多いほ場の二通りがある

● 稲ワラが多い理由

1. 疎植栽培により茎数を遅くまで確保しなければ穂数不足となり、収量が低下するため、中干しをしない又は遅くする。このため弱小茎が多くなる。
2. 肥効調節型肥料の施用により、中干しの期間中も窒素を溶出しており、無効茎や弱小茎が最後まで残っている。

● 稲ワラが多い場合の弊害

1. 異常還元が起きる。
2. 土壤還元によって酸素が奪われ、土壌中の硫酸根は還元によって、硫化水素が発生する。 $SO_4 \rightarrow S^{2-}$ は吸収されない。
3. 水稻のS欠乏症状は8~10ppm以下で発症する。
4. 硫酸根の入った肥料(ケイカル、石こう、硫酸、等)の施用で改善。

● 異常還元による黄化症状

1. 発生時期は地温が6月上旬(田植え後3週間)分げつ最盛期(6月15日頃)に見られる。
2. 坪状あるいは帯状に発生し水口部で発生が顕著に表れる。
3. ワラが多いほ場で、尿素系主体の窒素が多く、硫酸系肥料が少ない。
4. 基盤整備期のほ場で多く見られ、古くから発生があった。

こんな田んぼ増えてませんか！！



異常還元（ガスわき）



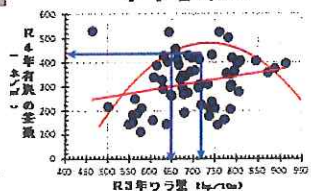
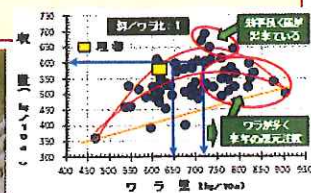
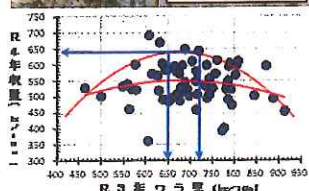
カナ・アオミドロ



表層剥離

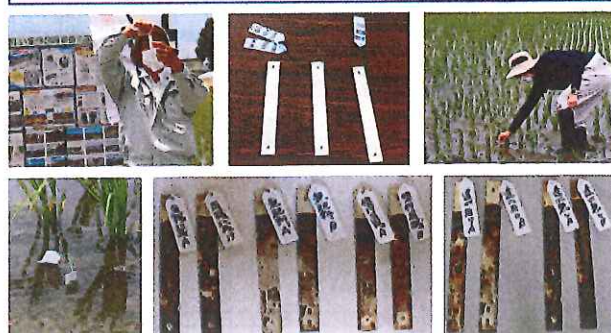
6月上・中旬の低温: 異常還元発生

移植後の温度上昇に伴い、有機物(稲ワラ等)が微生物により分解。酸素が奪われ、有害な硫化水素(ガス)が発生。
○生育不良、○根腐れ、○秋落ち。



環境にやさしい米づくり

米の生産で発生する温室効果ガスのメタンを抑制する栽培体系と高品質・食味米生産技術の確立を目的に、メタンガスの発生を銀メッキ板による黒変色の度合いを測定し、見える化した。



秋に稲ワラのすき込みをしましょう！！

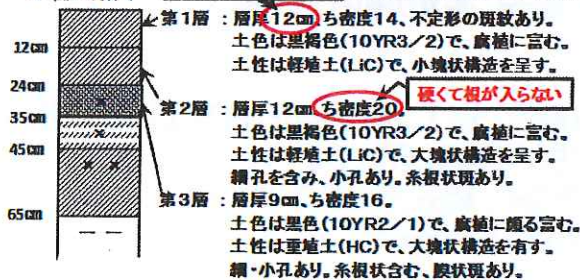
- 土づくり肥料を散布した後、ドライバローで5～7cm程度浅耕し、稲ワラと土を良く攪拌し分解を促進させる。
- 耕起こしが出来ない場合は、春には場が乾燥したら秋起こしと同様に稲ワラをすき込みます。

稲ワラのすき込みと土壌管理

水田土壌の物理性と断面

作土は浅く、耕盤が硬い

土壌の断面 作土層が極端に浅い



稲ワラをすき込む前の排水対策

近年、作業の省力化や効率性を求め、耕深が浅くなっている。理想的な作土の深さは15cm以上が望ましいとされているが、現状(機械化作業一貫体系)からすれば少なくとも14cmは確保したい。



パイプロップンイラ新機

深耕の効果は根域の拡大、養分供給量の増加などはプラスになるが、深耕によって下層土の不良土が混入することや、肥効の持続により過剰生育になるなど、マイナスの面もあるので、土壌タイプを考慮して耕起する必要がある。

土壌分析のススメ

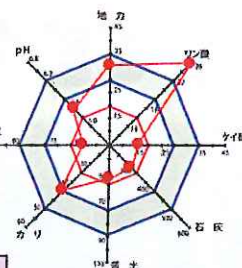
土壌診断の項目と目標値

ケイ酸に重点を置いた土づくりのススメ

- 土壌の養分状態を適正域に保つために土壌診断を実施する。
- 土壌分析は3年に1回実施し、土壌養分の変化を確認し、土づくり肥料の種類や施用量を決定する。

土壌診断の項目と目標値

項目	JAグループの目標値(%)
① pH	pH(H ₂ O) 5.0(5.0-5.5)
② 塩基交換容量(CEC)	mmol/100g 20(25-35)
③ 交換性石灰	陽イオン(CaO) mg/100g 400(400-500)
④ 交換性マグネシウム	陽イオン(MgO) mg/100g 20(20-30)
⑤ 交換性亜鉛	陽イオン(ZnO) mg/100g 40(40-50)
⑥ 塩基飽和度	% 75(70-80)
⑦ 可溶性ケイ酸	陽イオン(K ₂ O) mg/100g 20(15-22)
⑧ 可溶性ケイ酸	陽イオン(H ₂ O) mg/100g 20(25-35)



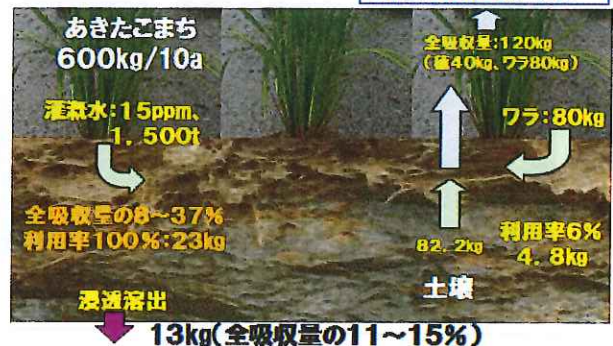
下図のレーダーチャートにプロットして過不足を判断する。

- 地力(CEC)、カリ最適
- pH低い
- リン酸過剰
- ケイ酸、石灰、苦土少なく、塩基飽和度低い

ケイ酸の吸収由来 (土壌、水、稲わら)

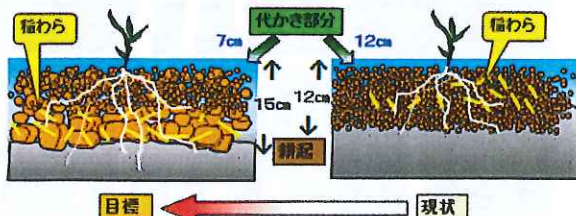
ケイ酸に重点を置いた土づくりのススメ

糠(籾と玄米)として持ち出した40kgは「天の恵」として返す



耕深確保と耕起・代かき

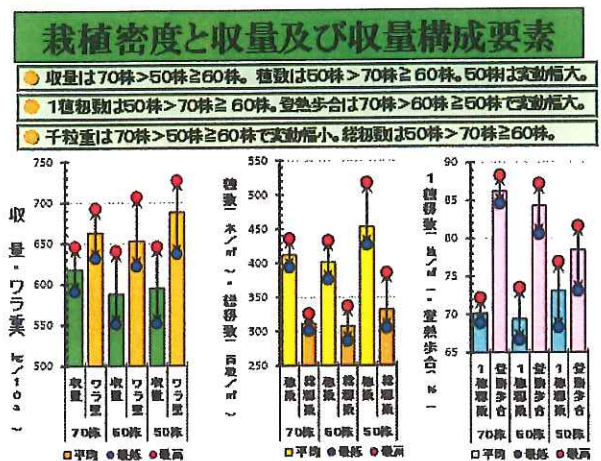
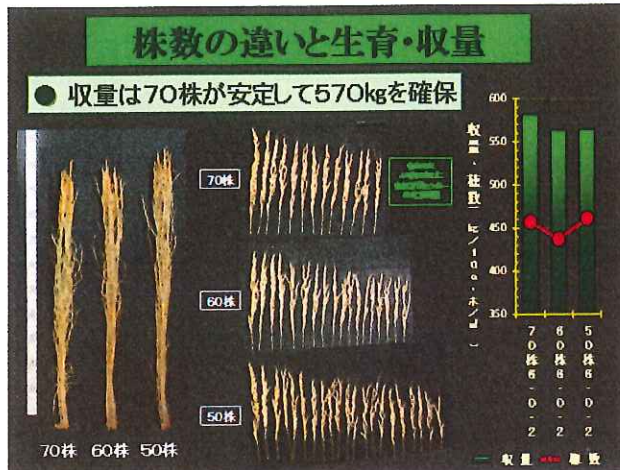
- 根に有効な土づくり
 - ① 根を深く張らせる環境づくり
 - ② 耕起や代かき方法の工夫
 - ③ ケイ酸肥料の供給
- 土壌タイプによって土づくりの優先順位は異なる。
- 土壌条件に合わせた土づくりを行う。



新たな水管理のための耕起・代かき

耕起は土塊状に・代かきは浅水で！！





飽水管理

先人の株づくりから学ぶ飽水管理

- 異常還元を回避し、土壌を酸化的に保つ
- 中干し以降(幼穂形成期)は強く乾かさない
- 登熟期間は同断かん水や湛水状態にしない

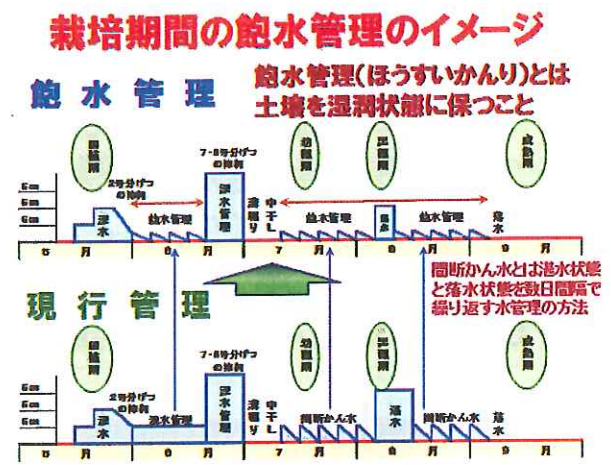
新たな水管理体系の作出

飽水管理

土壌を酸化的状態に保つ
中干し以降は強く乾かさない
出穂後30日は最終かん水

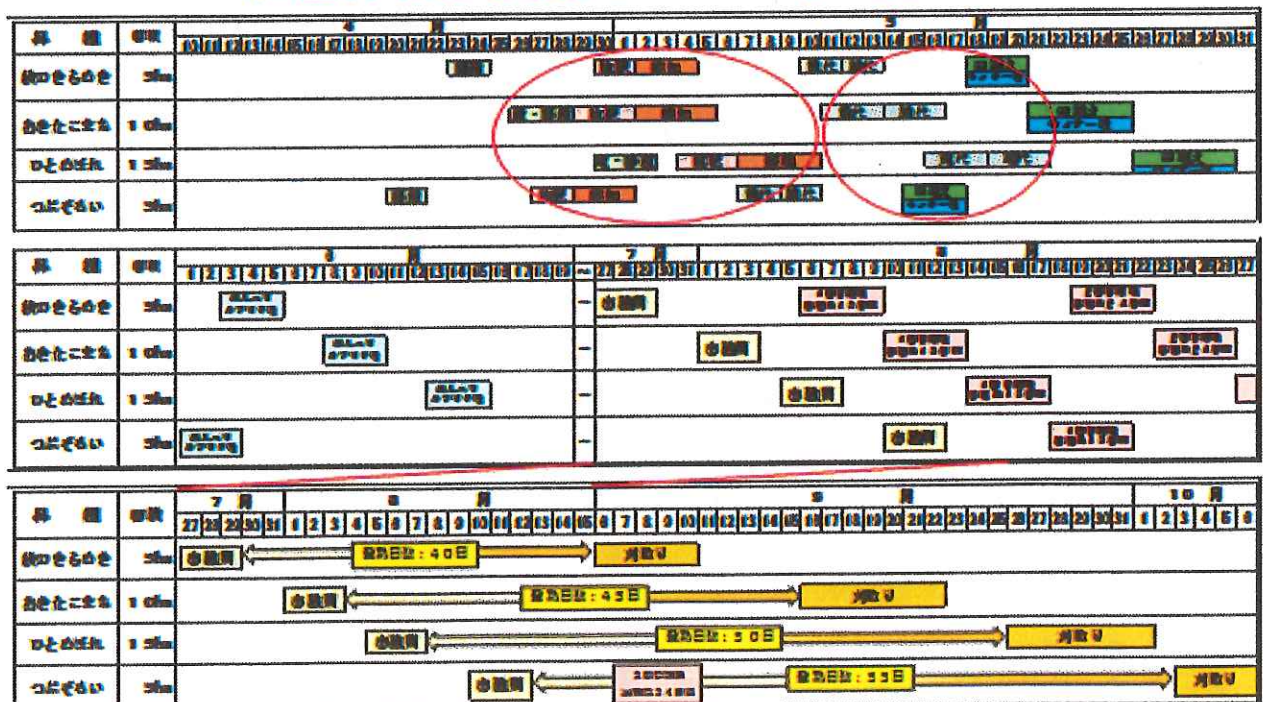
美人と育は秋田米

JAグループ秋田米穀部



規模拡大に伴う本田作業と育苗～収穫作業

水稲作付け体系のイメージ(一例)



まとめ

温暖化・気候変動を踏まえて

基本技術の励行

ここ数年の品質・食味・収量の低下を踏まえて

(春先・分げつ期の低温と登熟期間の異常高温と日照不足)

1. 土づくり肥料の施用と耕深の確保
2. 基肥窒素(速効性肥料)2kg/10aの増施(全層施肥、側条施肥)
3. 株数の確保(少なくとも70株/10a)
4. 植え込み本数の適正化(稚苗:4~5本、中苗:3~4本)
5. これら栽培法、施肥法を最低2つ、或いは3つ以上取り入れる

初期茎数の早期確保



- 気象変動リスクを軽減する総合的な土づくり
- 基肥窒素の適正化と速効肥料の増施
- 70株基本と3~4本/株の植え込み本数

中干しによる生育調節



- ほ場の排水対策:中干し、溝切り、程度の目安
- 水管理による適正な生育量確保と一茎の充実
- 生育中期の適正な肥培管理と生育・栄養診断



適期刈り取りの励行

- 品種毎に積算気温に達した時点
- 主茎の上位5番目の枝梗が黄化した時点
- 早晩性や天候を考慮して総合的に判断

変動気象に対応した稲づくり

土づくりを土台にした基本技術の見直し

高品質・良食味米の安定生産



日々、毎年の基本技術の積み重ねが重要

“秋田米フォーラム”は、秋田県産米のさらなる高品質・良食味米生産の取り組みを促進させ、近年全国的な良食味米の競争に打ち勝ち、秋田米ブランドの再構築を目的として、今年で10回目の開催となります。

第10回 秋田米フォーラム2022 開催 ～「美味しい“あきたこまち”コンテスト」表彰～



令和4年度産米「美味しい“あきたこまち”」コンテスト
優秀賞受賞者の皆様



“ザプレミアムファイブ”名付け親で、
これからの「秋田米への応援メッセージ」と題した基調講演
三越伊勢丹HD 田中常務



「味覚センサーとその活用事例紹介」
インテリジェントセンサーテクノロジー内藤常務 山本様



「本年の作柄と次年度の稲づくり」
全農秋田県本部 児玉参与

10周年 「美味しい“あきたこまち”コンテスト」

令和4年度産米 「ザ プレミアム ファイブ」

令和4年度産米「美味しい“あきたこまち”コンテスト」※で「玄米・白米の品質」、「食味値」、「食味官能評価」などについて、厳正な審査を経て受賞した上位5名のお米です。





最優秀賞【秋田県知事賞】
佐々木 孝久雄さん
(JAあきたこまち)



優秀賞
佐藤 正弘さん
(JAあきたこまち)



優秀賞
佐藤 昌徳さん
(JAあきたこまち)



優秀賞
佐藤 昌徳さん
(JA秋田なまはた)



優秀賞
佐藤 昌徳さん
(JA秋田しんがひ)

※JAグループ秋田主催 令和4年度産米「美味しい“あきたこまち”コンテスト」の審査方法について

お米の審査は、玄米と白米における水分、白さ、固さ、たんぱく質の割合等の品質評価と、専用の機器での食味値（おかしさ）の分析、更にごはんを食しての食味官能評価を実施し、厳正なる最終審査を経て、最優秀賞1名、優秀賞4名、並びに優良賞7名が決定いたしました。

いよいよ12月10日(土)より県内下記店舗で順次発売いたします。(数量限定)

○گرانマート ○コープあきた ○ナイス ○西武秋田店 ほか

優秀賞受賞米「ザ プレミアム ファイブ」を是非ご賞味ください。

コンテスト優良賞受賞者：武石 博（JA秋田たかのす）石山 金由（JAあきた白神）平澤 晋代美（JA秋田やまもと）佐藤 角榮（JA秋田しんがひ）武藤 秀一（JA秋田おぼこ）佐藤 清（JA秋田ふるさと）高橋 征志（JAあきたこまち）

JAグループ秋田・JA全農あきた

今年の不作は自然界でも春先から不吉な予兆！？

我が家の花木は一斉開花



れんぎょ



こぶし



さくら



つばき

今冬(12月～2月)は、昨年に引き続き寒気が入り込み豪雪となった。今年は県中央部と県南部では記録的な積雪となり水稲や野菜ハウス、果樹等に甚大な被害を与えた。3月に入ると一転して気温が高く日照時間の多い日が続いたことから、秋田市の桜の開花は平年より5日早まり4月12日となった。我が家の庭の花木も一斉に花が咲き乱れ春爛漫であった。

男鹿市、潟上市で竹の花が咲く



潟上市天王白州野周辺

潟上市天王
白州野周辺

秋田市一つ森公園



枯れた竹 潟上市天王白州野 令和4年7月17日

5月上旬に近所の生産者が、男鹿のなまはげラインの道路沿いや天王白州野周辺の竹林に花が咲いているので、2・3本取ってきたと言って我が家にやってきた。120年に1度だけ開花するとされており、学術的には何ら解明されていないが、花が咲くとその年は不作になるとの言い伝えがあることを話した。その時は気にも止めずにいたが、6月に入ってさがけ新聞に秋田市一つ森公園にスズタケの花が咲いている記事が載っていた。同じ竹であるとは知るよしもないが、早速カメラを持って家内と出かけ写真を撮って帰った。生産者が7月中旬に近くを通ったら今度はあちらこちらで竹林が枯れており、写真を撮ってみせに来た。不吉な予感があったものの、どのようにして何が起ころのか皆目見当がつかなかった。しかし、心の隅には何もなければ良いがと思いながら今年の出来秋を迎えた。竹はイネ科植物であることから、何か繋がっているのかと不思議でならない……？

過去に経験したことが無かった今年の気象

今冬(12月～2月)は、昨年に引き続き寒気が入り込み豪雪となった。今年は県中央部と県南部では記録的な積雪となり水稻や野菜ハウス、果樹等に甚大な被害を与えた。3月に入ると一転して気温が高く日照時間の多い日が続いたことから、秋田市の桜の開花は平年より5日早まり4月12日となった。

気象庁と仙台寒気気象台が4月に発表した6・7・8月の3カ月予報では、ラニーニャ現象が終息し、今夏はエルニーニョによる気温の高い確率が50%であると予想していた。秋田県を含む東北北部の日本海側の「梅雨入り」は平年並み～やや遅いとしていたが、「梅雨入り」は6月15日ごろで平年並みであると発表した。稲作期間中は、5月第6半旬～6月第4半旬の低温と日照不足に見舞われた。一転して6月第6半旬～8月第1半旬は高温・多照となった。出穂後の8月第2半旬～第6半旬の登熟中・後期は大雨と極度の日照不足に遭遇した。各地で線状降水帯が発生し、大雨が降り続き田畑の冠水や土砂が流入し、一部水田では収穫が困難な地域が発生した。8月の降水量は各地で観測史上第一位を記録した。

また気象庁は9月1日に、今年の梅雨入りと梅雨明けの確定値を発表した。速報値では多くの地方で6月下旬を梅雨明けとし、観測史上最速となっていたが、確定値では24～28日後ろへ大幅に修正して7月下旬とした。一度に多くの地方について大幅に修正されるのは異例であり、過去にはほとんどなかった。本県の速報値では7月26日を梅雨明けと発表していたが、確定値は北東北を含む東北地方は時期を特定できないと修正された。成熟期を迎えた9月第2半旬からは、台風の被害はなかったものの、温帯低気圧大陸沿岸を北上したためにフェーン現象が発生し、乾いた東風が吹いた。

こうした気象変動は毎年のように繰り返され、気象庁は、今後も温暖化による異常高温と気象変動が続くとしている。

冷たい雨に打たれる稲

令和4年6月3日～17日



一転して高温・多照・多日射

令和4年6月21日～8月6日



農林水産省東北農政局が12月9日に公表した10a当たり予想収量(ふりい目幅1.70mm)は554kg、作況指数「95」作柄は「やや不良」と発表した。東北6県の中で唯一「平年並み」を下回る作柄であった。秋田県が「やや不良」となったのは、平成30年以来4年ぶりである。地帯別作況指数は県北と中央が「94」で作柄は「不良」、県南が「97」で作柄は「やや不良」、10a当たり予想収量は県北530kg、中央548kg、県南571kgであった。生産者等が使用しているふりい目幅(1.90mm)で選別した10a当たり予想収量は、県北493kg、中央505kg、県南537kg、県平均では517kgであった。

また、同東北農政局が11月30日に発表した令和4年産米の本県の1等米比率(10月末現在、水稻うるち玄米)は90.0%であった。昨年の同時期に比較すると0.5ポイント減になっている。銘柄別の1等米比率は、あきたこまち90.6%、めんこいな89.9%、ひとめぼれ95.1%、ゆめおぼこ90.4%、今年から本格的に作付けされたサキホコレは検査数量が2,625トンと少ないが、98.1%で高水準となっている。2等米比率は7.9%、3等米は0.7%、規格外は1.4%であった。2等以下に格付けされた理由として最も多かったのは、未熟粒等の形質が41.4%、カメムシ等による着色粒が36.8%、次いで整粒不足が16.2%であった。

各地域振興局農林部農業振興普及課が行った8月19日の定点ほ場「あきたこまち」の生育調査では、全県平均でみると、出穂は8月1日(平年差-1日)でほぼ平年並みになっている。同ほ場の9月15日調査では、成熟期は平年より3日遅い9月19日、稈長は85.1cm(平年比105%)、穂数は399本/m²(平年比88%)、1穂粒数は77.6粒(同111%)、総粒数30.9千粒/m²(同98%)である。穂数が少なく、1穂粒数が極端に多くなっている。「あきたこまち」の1穂粒数は70~73粒が理想とされているが、本年は1穂当たり5粒程度多くなっている。1穂の着粒数を詳しく見ると、1次枝梗はほぼ平年並みであったが、2次枝梗の粒数が約5粒多いことから、登熟歩合が82.7%(平年差-3.7%)と低くなっている。収量調査の結果では、全県平均でみると、収量は541kg(平年比93%)、全重は1,433kg(同97%)、精粒重は725kg(同95%)、登熟歩合は82.7%(平年差-3.7%)、千粒重22.8g(平年比101%)となっている。収量を左右した要因は精粒重の減少によるもので、これは穂数が極端に少なく(平年比88%)、総粒数の減少が反映したものと推察される。8月中・下旬は大雨と極度の日照不足により、登熟が緩慢に推移し、刈り取りを控えた地域が多かった。このことから充実度不足や青未熟粒が多く、見られたこと、刈遅れによる胴割れ粒が発生した。

8月下旬から行った全県のJA稲作営農指導員、実証ほ担当生産者へのほ場巡回・講習会を9月6日に終えた。行く先々で登熟のほ場間差や株内のバラツキがみられ、刈取りの判断が難しくなると不安げであった。温暖化になっても旧態依然とした栽培管理では対応が難しくなっている。稲刈りが終わった田んぼは、緑色の「ひこばえ」が目立ち、稲作期間中の気象に思いを馳せる。種苗交換会では、平年作であったことを耳打ちする生産者が2割ほどいた。話を聞いていると規模の大きい経営体が収量を大きく減らしているようである。田植えが1ヵ月以上に及んでおり、基本技術は理解していても大雨や異常高温に対応する肥培管理が不十分であったとの声が多く、なにか稲づくりに構造的問題を抱えているのではないかなと思わざるを得ない。「着眼大局、着手小局」とは最悪の事態を想定して大きく構えることを言う。稲づくりも目標の稲を想定してどのように栽培するのか、実践に当たっては日頃の肥培管理をコツコツと積み上げることが肝要であろう。最悪の事態を想定して稲づくりを考え、空振りに終わったとしても、きめ細かな肥培管理は高品質・良食味米の生産には欠かせないことである。生産者はいろんな情報を得る機会がたくさんあることから、常にアンテナを張り巡らせて、必要な情報を取捨選択して稲づくりを進める必要がある。そのための情報は惜しみなく提供して参りたい。稲づくりは、基本技術と対応技術を理解した上で、高品質・良食味米の生産が可能になることを忘れてはならない。生産者にとっても正念場の時期を迎えようとしている。いかなる気象条件に遭遇しようとも、品質の良い美味しい米の生産を心掛ける必要がある。大豊作とまではいなくても、少なくとも平年作を目指した稲作期間中の肥培管理に努めたいものである。

こだま

全国農業協同組合連合会 秋田県本部
〒010-8558
秋田市八橋南2-10-16
URL:<https://www.zennoh.or.jp/ak/>

資料の使用に当たって
は米穀部の許可を得る

JA全農あきた米穀部
〒011-0901
秋田市寺内字神屋敷295-53
TEL:018-845-8500
FAX:018-880-1572